

みんなちがって、みんないい

安中市立松井田南中学校

三年 寺嶋 咲季

「障害者なんかいなくなればいい」

昨年七月、神奈川県知事的障害者福祉施設で発生した、戦後最悪の大量障害者殺人事件。この言葉は、その容疑者が供述したものです。

皆さんはこれを聞いて、どう思いますか。多くの方が、なぜ彼がこのようなひどいことを言ったのかと疑問に思うのではないのでしょうか。以前までは私もそう思っていました。しかし、実は私たち無意識ではあるものの、障害者差別をしているのです。

私がそれに気がついたのは、事件発生から三ヶ月が過ぎた頃、ある大学の文化祭で、この事件に関する研究発表を聞いたからです。それは、「容疑者だけではなく、私たちも彼と同じように障害者を差別している。例えば、妊娠・出産の時に

誰もが抱く『健康な子であってほしい』という願いは、いわば障害者への差別である。」という内容でした。

私は、それを聞いて心が病みました。以前は、「自分がどうか」までは考えていなかったのです。私が子どもを産む立場であっても、必ずそう思うと思います。しかし、それは「障害を持って生まれてきてほしくない」ということに他ならないのです。

最近では、お腹の中にいる赤ちゃんが障害を持っていると知って中絶をする人が増えてきているそうです。これも、突き詰めれば容疑者と同じ考えだと言えるのではないのでしょうか。

彼は、犯行前に重度障害者に対する「安楽死」を主張していたそうです。「安楽死」とは、助かる見込みのない病人やけが人に余計な苦しみを与えずに済むように迎えさせる死のことですが、彼の主張には、やはり「障害者は殺してしまえばいい」という思いが大元にあるように感じます。

私は以前、視覚障害のある人と一緒に走る「伴走」をしたことがあります。皆が走ることを楽しんでいて、私には、皆が生きることによって幸せを感じているように見えました。もし彼

らが「安楽死」を勧められたら、どう思うのでしょうか。きっと、言葉に表せないほどの怒りや悲しみの気持ちがあふれるに違いありません。

では、私たちはどのように障害者と接していけばよいのでしょうか。「障害者基本法」の第三条にはこのように書かれています。

「全ての障害者が、障害を持っていない者と等しく、基本的人権を享有する個人としてその尊厳が重んぜられ、その尊厳にふさわしい生活を保障される権利を有する。」

この法律は、全ての人が一緒に生活できる「共生」を目標に定められたものですが、現在の日本はまだ完璧とは言えません。保育施設などへの障害者の入所を断られることも少なくありません。専門家がいらない、ということもありますが、そもそも私たちの見方にも問題があると思います。

「障害者を『同情される人』とみたり、その『障害』をみてひとりの『人間』をみないでいることへの反省や、彼らに『ひとりぼっち』とかんじさせない援助のたいせつさをわすれてはならない。」

私は、ある本に書かれたこの一文を読んで衝撃を受けまし

た。私たちは障害者を「障害」で差別してしまっているのです。「自分と違う」と差別するのではなく、「個性」と見るべきではないでしょうか。

私のいとこにも、障害を持って生まれた子がいます。出産予定日近くになって、心臓の心室が一つ動いていないことがわかったのです。私も、彼女が多くのチューブにつながれていた写真を見たことがあります。しかし、度重なる手術の結果、成長の遅れはありますが、今は兄弟に囲まれて元気に育っています。このいとこが「いなければいい」なんて私は思いませんし、彼女と彼女の障害に向き合うおばにたいへん失礼だと思います。

金子みすゞさんの「私と小鳥とすずと」という詩に「みんなちがって、みんないい」という言葉があります。私たち世界中の全ての人が障害者に対する見方を変えれば、二度とあのような事件は起きないはずですが、また、「共生」への道がひらかれていくでしょう。私はそれを願っています。

最後にもう一度、あなたの心に問いかけます。あなた自身に容疑者と同じ考えが全くない、と言い切ることができますか。